

□ 器楽(室内楽を含む)

渡 辺 和

2016年7月26日、ピアニスト中村絃子が没した。享年72。2014年以降は病气キャンセルが目立ったとはいえ、4月に復帰し5月初旬までオーケストラ独奏やリサイタルも開催。本格的活動再開への期待が高まっていただけに、驚きの感は否めない。

中村絃子以降も、著名コンクールを制し日本でキャリアを重ねた音楽家はいくらでもいる。近年では、2009年にクライバーン・コンクールで優勝し一躍著名ピアニストとなった辻井伸行は、昨年日本各地の大ホールでリサイタルを重ね、オルフェウス室内管(6月)やヨーロッパ室内管(10月)と共演するツアーも完売するなど、人気に衰えを見せていない。だが、結婚が週刊誌で話題となり、大事故や天災時にアーティスト代表としてチャリティーを主導し、芸術関連法案が国会で審議されればコメントを求められ、計報が各メディアで一斉に報道される「日本人の誰もが知る国民的ピアニスト」は、中村だけだった。ひとつの時代の終わりばかりか、日本社会に於けるクラシック音楽の位置付けの変化も感じざるを得ない。

無論、中村絃子と同世代で日本を舞台に積極的に活動する世界の巨匠らはまだいる。中村絃子が4位入賞したショパン・コンクールの優勝者マルタ・アルゲリッチは、18回目となる別府アルゲリッチ音楽祭(5月)総監督を務め、直前に発生した熊本大分震災のチャリティーも主導、秋に旭日中経賞を受賞した。少なくとも特定の地域において、中村絃子に代わる「国民的ピアニスト」としての役回りを果たしているのはこの人かもしれない。同じく老巨匠となったボリーニは4年ぶりに来日(4月)。独奏リサイタルを開催する一方、東京・春・音楽祭では演奏はせずに1月に没した盟友ブーレーズをフィーチャーした室内楽演奏会のプログラミングのみを行った。未だにソリストとして圧倒的な人気と集客力を誇る両者が室内楽や音楽祭プロデュースにも積極的なのは、後述の「器楽・室内楽のフェスティバル」の流れと無縁な現象ではあるまい。

日本の経済状況がどうあれ、内外の中堅・若手演奏家のリサイタルや室内楽活動は、言及し始めると限りがない程盛んである。とはいえ、昨年の当稿でも触れたリサイタル会場の小規模化というトレンドは変わっていない。若林顕(1月)、外山啓介(8月)、及川浩治(9月)、神尾真由子(10月)のサントリー大ホール、小山実稚恵(6、11月)の文化村オーチャードホール、ミッシェル・ペロフ(3月)のすみだトリフォニー、ヒラリー・ハーン(6月)のみなどみらい大ホールなど、2000席クラスの大ホールでのリサイタルは意欲的と感じられる程である。

東京の個人リサイタルの場合、棲み分けが明快になってきている。著名外国人演奏家でも東京オペラシティが最大規模で、中堅で紀尾井ホールや浜離宮朝日ホール。若手の手打ち自主リサイタルは、ハクジュホールや自主公演を止め貸館に徹するようになったJTアートホール、小規模コンサートスペースの嘴矢ムジカーサ、ソノリウムや松濤サロンなど、都内各地に次々とオープンしている良質の音響と整備されたピアノを備えた100席から最大200席規模の個人所有コンサートスペースが中心。世界の都市の中でも、演奏家の個人主催によるリサイタルの数がソウルと並び異常に多い東京や大阪では、500席規模の公共小規模会場を埋めるべく関係者や親戚、友人、弟子などにチケット手売りする手間や苦勞を考れば、自主リサイタル会場の小規模化は当然であろう。

室内楽でも、ホール主催若しくはフェスティバルなど主催者側の特別な事情が無い限り、サントリー大ホールや東京芸術劇場などでの公演はほぼ皆無。通常公演では、ハーゲンQ(9月)やゲヴァントハウスQ(9月)の東京オペラシティが最大のキャパシティだ。かつてはサントリー大ホールを会場としたジュリアードQ(6月)は、チェロ奏者クロスニツクの引退という

イベント性の高い公演でも敢えて紀尾井ホールを会場とした。ジャンルとしての適正化という意味では、健全な現象なのかもしれない。

クラシック音楽界全体の興行としてのイベント化の流れは、器楽室内楽にも大きな影響を与えている。地道な告知作業や常任スタッフが必要な演奏会シリーズより、集中的な告知や人員配置が可能な「フェスティバル」を好む傾向が顕著となっている。演奏家個人主催ではないリサイタルや室内楽は、大規模音楽祭の一部として位置付けられ、公演数を維持しているのである。有楽町、金沢、新潟、びわ湖のラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンは、ゴールデンウィーク日本各地の定番イベントとして定着した(金沢は昨年で終了)。この方法に刺激され、東京上野の「東京・春・音楽祭」(3、4月)、大阪の「大阪クラック」(9月)、仙台の「せんとくら」(9、10月)など、行政や地元商工会議所主導の移動遊園地型音楽イベントが各地で開催されるようになり、とりわけ室内楽に疎遠だった聴衆にこのジャンルを広く紹介する役割を果たしている。

「サントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデン」(6月)の成功に触発されたか、常設スタッフを有するホール主催公演でもフェスティバル化の傾向は見えつつある。地道なレギュラー公演を続けてきたトッパンホールも、テツラフら著名奏者を揃え「15周年室内楽フェスティバル」(5月)を開催した。各ホール主催公演のフェスティバル化が進行し、レギュラー公演で年間365回超えを目指す名古屋の宗次ホールの考え方が異端となってしまうのか、興味深いところだ。

そんなフェスティバル型にイベント化されたリサイタルや室内楽公演で、経費対効果の面から盛んに登場するのがコンクール上位入賞者である。2016年も数多くの日本の若い音楽家が国際コンクールで結果を残している。ヴァイオリン木嶋真優(上海1位)、岡本誠司(ヴィエニャフスキ2位)、小川恭子(ノヴォシビルスク1位)、オルガン富田一樹(ライプツィヒ国際パツハ1位)、ハーブ景山梨乃(ミュンヘンARD3位)など、それなりの成果を上げている。とりわけ、優勝賞金史上最高額の大会として世界の弦楽器関係者の注目を集めた第1回上海アイザック・スターン国際バイオリンコンクールを制した木嶋の成果は、諏訪内晶子や辻井伸行に匹敵する社会現象になってもおかしくない価値があるのだが、日本では音楽マスメディアですら殆ど取り上げなかった。コンクールというシステムの変質なのか、それとも相も変わらぬ本場志向の日本音楽業界及び聴衆故なのだろうか。

なお、そもそも国際レベルのコンクールが少ない室内楽の世界にあって、2016年は弦楽四重奏のメジャー大会がボルドー、バンフ、ミュンヘンARD、ジュネーヴと4箇所で開催される異常な年となった。とりわけ、バンフとミュンヘンARDという重要な大会が重なってしまい、世界でも数十しかないコンクール参加レベルの若手団体が頭を抱えることになる。そのような状況の中、今世紀になって国際大会への参加が極端に減っていた日本の弦楽四重奏団のアルパQ(バンフ)とアマービレQ(ミュンヘン)が参加を認められたことは特筆すべきであろう。後者は本選まで進み、委嘱現代作品演奏賞とウエルズ弦楽四重奏団以来となる3位を獲得した。2010年代に入ってから各地で開催される室内楽アカデミーの成果が上がりつつある一方で、ミュンヘンに元東京クワルテットの磯村和英、ジュネーヴに今井信子と日本を代表するヴァイオリンの巨匠が審査員として参加するも、その下の世代に審査員に値する人材が見当たらない日本室内楽界の厳しい現実も顕わになりつつある(ミュンヘンARDコントラバス部門では河原泰則が審査委員長を務めた)。NPO法人として日本で常設弦楽四重奏団の活動をするクアルテット・エクセルシオが、昨年ようやく東京都から認定NPO法人の仮認定を受けたのは、微かな希望であろう。

最後に、昨年の音楽界で最も重要なかもしれない話題に触れておこう。4月にヴァイオリニストの澤和樹が東京藝術大学学長に就任した。音楽学部からの学長は、福井直俊以来37年ぶりのことである。澤就任前から始まっていた藝大改革は、東京藝大ジュニア・アカデミーや大学院国際芸術創造研究科設立など、目に見えるものとなりつつある。春以降に社会問題化する可能性が高い上野学園騒動と並び、2017年は上野が台風の眼となりそう。